

浙江省 紹興市 大禹陵 山上

志氣を説く

ある青年が、田舎にかえり帰農するので、話をさききたいと、私の意見を求めてきた。私は彼に、気骨をもって長期戦を貫き、我が国農業の近代化に尽くしてほしいと、激励した。私が、勇敢な志氣を抱くことを強調すると、彼がそれに反発したのである。

これは、全く予想外の出来事であった。

その青年は、私が用いた気骨という表現は空虚な抽象的表現であり、浮ついた表面的な概念で、唯物思想と根本的にそぐわないというのだ。彼の認識では、志氣とは主観的唯心主義的な概念で、唯物主義と根本的に異なるというのである。それはあまりにも一方的な考え方で、間違っていると率直に云ってやった。その後まだ言い足りない気がして、ここに私の意見を書き述べるので、その他の青年の皆さんにも読んでいただきたい。

中國の古代学者、なかんずく宋代の理学家は、志氣を説明するのに極めて深淵かつ微妙な表現をしている。特に有名なのが朱熹であるが、『朱子全書』で彼はこう述べている。”志は心の之（ゆ）く所にして、情意に比べて尤も重し。氣は即ち吾が血氣にして而して体に充つるものなり。”



浙江省 紹興市 安昌古鎮

真徳秀の『真西山集』にも、『問志氣』という一篇があり、こう述べている。“志は心の志を謂い、氣は血氣為（な）り。”宋儒のこの議論は、志氣を唯心主義的に解釈したものである。宋儒達は問題点を明確にすることができなく、わかるようで分からぬ、難解な解答をくださったので、我々は、頭を絞らねばならない。下って、元代理学者の許衡に『魯齋心法』という著作があり、そこでこう述べている。“雲は龍に従い、鳳は虎に従い、氣は志に従う。龍虎の在る所、而して風雲之に従う。志の在る所、而して氣之に従う。”このこじ付けの表現は、古書でよくあることで、兎に角、我々が現在、古書を読むに当たっては、この糟粕を棄て、砂金を掬うように、古書の精華をくみ取らねばならない。

ここに諸葛亮の『誠外甥』という一通の手紙がある。ぜひ皆さんに読んで頂きたいと思う。その手紙によると、“夫れ志は當に高遠に存すべし。先賢を慕い、情慾を絶ち、凝滞を棄て、庶幾の志をして、揭然と存する所有り、惻然として感ずる所あらしむ。屈伸を忍び、細碎を去り、諂文を広げ、嫌吝を除き、雖へ淹留有るといへども、何ぞ美趣を損せんや。何ぞ濟（な）らざるを患はん。若し志 強毅ならず、意 慷慨せずんば、徒（いたづら）に碌碌と俗せられ、默默と情に束され、永（とこしえ）に凡庸に窟伏（どんぶく）せしめられ、下流に於ること免れず。”この手紙を書いた諸葛孔明先生は、主に紀元三世紀の初頭に活躍し、その思想は時代の条件により制約があり、完璧とはいえないが、その他同時代の人々と比べると、彼の見解には彼独特の良さがあり、得難い存在であると思う。彼が説くことは、まず崇高遠大な志をたて、凡俗下流に流されることに反対している。ここが重要な点である。私と話したあの青年は、立志を高遠にすることの重要性を知らなかったので、志氣の強調は浮薄な行いではないかと心配したのだ。

志氣の物質性を、唯物主義の観点から、正確にそれを説明することができる。この道理は明白である。人は志なくしては生きていけない。如何なるひともし己の志を実現するために、それ相当の気魄が必要である。志とそれを実現する気魄は、つまるところ物質運動の客観的過程の反映であり、同時に、人間の高級神経なる物質自体の活動結果に外ならない。

徹底的に立ち遅れている我が国農業の実情を認識した後に、それを改造して近代化農業の建設を目指そうという思いが浮かんだ、これは君の思想上に一種の強烈な反応が生じたのである。これこそ高尚な志である。この志を実現するために、君は、現実より出発し、各種の主観的、客観的条件を分析して、長期の努力をしても農業改造を成し遂げる決心に至ったのだ。これは偉大なる革命気魄である。これより分かるように、志氣を抽象的空虚なものとするのは、適切ではなく、唯心的概念と決めつけることは、一方的で、大きな誤りである。

考えて下さい。もし我々が崇高なる遠大な志を持たず、眼前の細事に満足して平々凡々と日を過ごして、偉大なる社会主義、共産主義社会の建設ができると思いませんか。

ここで、個人の志氣と、集団の志氣と統一して述べると、雄大な大志は、ひとりの大志で成り立つのではなく、多数の志氣の集合である。個人は青少年の頃、集団の支えにより、祖国人民の要求に根差して、遠大な大志を抱き、その実現のためにはあらゆる困難をもとせず、奮闘を続けたのだ。

【掲載当時の時代考証と秘められたメッセージ】

「説志氣」ひとそえ

本編の鍵となる「志」は繰り返し登場してきます。それが唯心的か、唯物的な解釈が可能か、牽強附会とは言わないまでも、少々無理な説法が続きます。また口号（スローガン）のような文末の二行で締めくくった意図は微妙です。

農村工作へ赴く若者への激励のポーズをとっているものの「我が国の落後した農村を改造して現代化した農業にする」という「志」の遂行や具現化が容易ではなく、その実態と情報をよく知るのは鄧拓であったと想像します。

農業の停滞は昨日今日に始まったわけではないにしても、大躍進政策（英国並みの鉄鋼生産量を目標に、農民の鋤や鋤を土法と呼ばれた簡易溶鋳炉で溶かしたという事例がよく使われます）の下、天災や蝗害が重なった農村は「落後」ではなく「崩壊」して数千万人単位の餓死者が出たと後になって知らされています。当時、上海に赴いたことのある関西華僑の方から都会の実例を聞いて半信半疑となり、農村からの伝聞は七信三疑で腹に納めたことを思い出します。

札幌農学校のクラーク博士の「Boys be ambitious」に続く言葉が詮索されています。北大教師の友人は「like this old boy」で締め括ることが多いと言います。

米国に帰る博士を見送った折の馬上でのやりとりは、生徒側に記録もなく、乏しい英語力による記憶の産物でしょう。その時のクラーク博士は50歳過ぎであり、鄧拓と同じ年齢格好となります。鄧拓はold man意識があったのでしょうか？

井上邦久



中國切手 諸葛亮孔明



札幌市羊ヶ丘展望台 新クラーク博士像

说志气原文

有一位青年朋友，准备回农村参加农业生产，要求同我谈话，征求我的意见。我鼓励他要有志气经过长期的努力，把我国落后的农业改造成为现代化的农业。我强调要有这样雄伟的志气，不料他却不以为然。

他说，我们不应该讲什么抽象空虚的志气，以免浮夸不切实际。他认为，所谓志气是主观唯心主义的概念，根本不符合于唯物主义。我当时很直率地指出了他的这种看法是片面的不正确的。我说，志气可以有唯心主义的解释，他可以有唯物主义的解释。现在觉得还有把我的意见写出来的必要，以供其他青年朋友的参考。

我国古代学者，特别是宋代理学家，常常把志气讲得很玄妙。最著名的如朱熹，在《朱子全书》中说：“志者心之所之，比于情意尤重；气者即吾之血气而充乎体者也。”真徳秀的《真西山集》也有一篇《问志气》，其中说：“志谓心志，气为血气。”这些宋儒的议论，实质上都是对于志气的唯心主义的解释。他们没有可能把问题说清楚，而只能似是而非地敷衍一番，令人费解。还有，元代理学家许衡，在他所著的《鲁斋心法》中说：“云从龙，风从虎，气从志。龙虎所在而风云从之；志之所在而气从之。”这一类牵强附会的说法，在古书中就很少，我们现在读古书，必须抛弃这些糟粕。要象沙里淘金一样，善于吸收古书的精华。

在这里，我倒希望大家读一读诸葛亮《诚外甥》的一封信。这封信写道：“夫志当存高远。慕先贤，绝情欲，弃凝滞，使庶几之志，揭然有所存，惻然有所感。忍屈伸，去细碎，广咨问，除嫌吝，虽有淹留，何损于美趣？何患于不济？若志不强毅，意不慷慨，徒碌碌滞于俗，默默束于情，永窜伏于凡庸，不免于下流矣。”这位诸葛孔明先生，主要的活动都在公元第三世纪的初期，他的思想受了当时条件的限制，当然不可能都很完善，但是，他的见解与其他古人的相比，却有许多独到之处，确属难得。他首先主张要树立崇高远大的志向，反对庸俗下流的倾向。这一点就非常重要。我的那位青年朋友，害怕强调志气会产生浮夸的毛病，正是因为他不懂得立志高远的重要性。

其实，所谓志气，我以为应该用唯物主义的观点，正确地说明它是物质性的。这个道理很明显。任何人都不能没有志向；任何人为了实现自己的志向，又都不能没有相当的气魄。一定的志向和实现这志向的气魄，归根到底乃是物质运动的客观过程的一种反映；同时，也是人的高级神经这个物质本身活动的结果。

当你彻底地认识了我国农业十分落后的实际情况之后，在你的思想上就会发生一种强烈的反应，要把这落后的农业改造为现代化的农业。这无疑地是一种高尚的志向。为了实现这个志向，你又不es能从实际出发，分析各种主观的和客观的条件，从而下定决心，要进行长期的努力，去改造农业。这就是一种伟大的革命气魄。由此可见，把志气完全看成是抽象空虚的、不切实际的、唯心主义的概念，那是非常片面的、非常错误的。

试想一下，假若我们没有崇高远大的志向，而庸庸碌碌地只看到眼前的一切，那末，我们又怎么能够建设伟大的社会主义和共产主义的社会呢？

当然，这样的雄心大志，绝对不能只是一个人的志气，而必然是最大多数人的集体的志气。在这里，各人的志气和集体的志气完全可以统一起来。但是，在集体的力量支持下，从每一个个人来说，在年轻的时候，就应该根据祖国和人民的需要，树立雄心大志，并为它的实现而不怕一切苦难，坚持奋斗。